

特集

The TEIDAN 鼎談

～聞くこと、話すこと、読むこと、書くことをバランスよく～

子どもの国語力をどう伸ばしていくかを考える

平成32年度(2020年度)から、小学校高学年で英語が正式な教科になり、道徳もそれに先行して小・中学校で教科に位置付けられるなど、10年ぶりに改訂される学習指導要領の内容は大きく変わることになりました。2020年には東京オリンピック・パラリンピックの開催もあり、子どもたちには日本人としてのアイデンティティをもち、かつ、豊かな国際感覚を身に付けることが期待されています。一方、全国学力・学習状況調査の結果から、本市の子どもたちの国語力に課題のあることが分かっています。

生きていく上で基本となる「国語力」。学校生活や日常生活で、どのように子どもたちの「国語力」を高めていったら良いのか、コミュニケーション力や考える力を子どもたちがどうしたら身に付けていけるのか、昨年10月、「市立小学校児童の国語力の向上」をテーマに、市立第二小学校の石居校長、市立第三小学校の山口主任教諭、市教育委員会の富永統括指導主事に話を伺いました。今号はその概要をお伝えします。

国語力の低下と言われますが



学力調査の結果から見えることは…

○司会 子どもたちの国語力の低下が問題になっている。東久留米市の小学生の状況はどうなのか。

○富永 平成28年度に小学校6年生が受けた全国学力・学習状況調査では、国語は全国平均及び都の平均を下回っている。市の学力調査についても同様の傾向である(図1)。

○司会 根本的なところで、主語と述語がおぼつかないという指摘もあるが。

○富永 昨年度の学力調査の結果を受け、小学校で国語の改善の取り組みを始めたのはまさにそこにあり、主語と述語の関係を捉えられていなかったことが背景にある。低学年で習った後も意識的に指導していかないと、主語や述語などの理解は定着していかない。

○石居 ささまざまな場面で国語力の低下を感じている。ケンカを始めた子どもたちに「原因をきちんと説明して

石居信義 (いしいのぶよし)。市立第二小学校長。



市授業改善研究会国語部会部長。第二小学校は平成25・26年度に市の研究推進校の指定を受け「共に学び、読みを楽しむ児童の育成」をテーマに、2年間にわたって国語教育の研究に取り組んだ。「読むこと」に焦点を当て、交流の時間を大切にすることや単元を貫いて言語活動を設定することなどの研究を進めてきた。

山口真弓 (やまぐちまゆみ)。市立第三小学校・主任教諭。



平成26年度から市国語力ステップアップ学習事業推進委員。平成27年度には市の研究奨励校の指定を受け、『分かる・できる』を実感できる指導法の工夫をテーマに、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた国語科の授業づくりの研究に取り組む。子どもたちが、自分の考えを自分の言葉で表現する力を身に付けられる授業づくりを行いたいと考えている。

富永大優 (とみながたいゆう) 統括指導主事 (本市教育委員会2年目)。



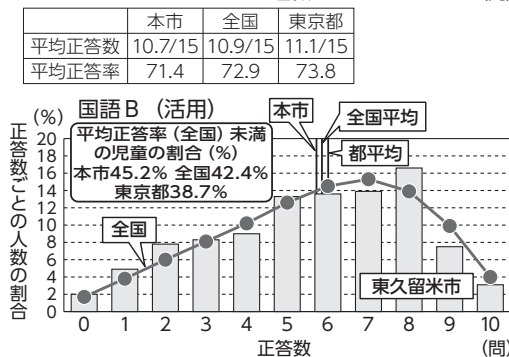
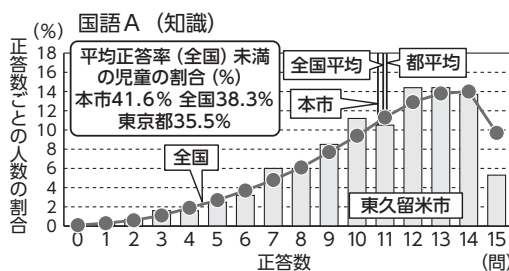
指導主事とともに、市立小・中学校の学習指導、生徒指導、学校経営などについて指導・助言を行っている。小学校教員の時代から国語指導の研究を続けている。

○富永 子どもがそういった状況については、大人にも課題があると思う。日常生活

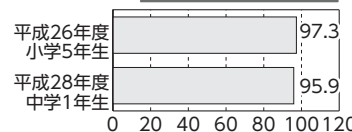
授業で分からない言葉や辞書で引く場面があっても、辞書に書いてある意味が実生活と結び付いていないので、子どもの中にストンと落ちていかない。これでは言葉も増えていかないし、「この場合にこういう言葉を使えば、自分の気持ちやびびったりと言いつける」「相手に分かりやすく伝えられる」という経験が不十分なままである。

○山口 コミュニケーションを取る時の言語の力不足については、日々子どもたちに接している。

〈図1 学力の定着状況 (小学校の国語)〉



〈図2 学力の伸び (国語)〉



《小学校国語の調査結果》

◎全国学力・学習状況調査による学力の定着状況の概要 (図1)



国語A・Bは正答数の多い層が厚い▼国語Aは中間層がやや少ない▼平均正答率は全国平均及び都平均を下回っている▼平均正答率 (全国) 未満の児童の割合は全国に比べて国語Aは3.3ポイント、国語Bは2.8ポイント多い。

また、全国平均より下回っている課題のうち顕著なものは、「ローマ字の読み・書き」「漢字の読み」「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って質問する」「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読む」ことなどである。

◎市の独自調査「確かな学力の伸長を図るための調査」による国語の伸びの概要 (図2)

平成26年度小学5年生では、全国平均値100を2.7ポイント下回っていた。平成28年度中学1年生でも4.1ポイント下回り、2か年

で1.4ポイント下降した。また、全国平均より下回っている課題のうち顕著なものは、「指示語の内容理解」「必要なことを書く」「内容を整理して書く」「書き方の工夫」などである。

※「全国学力・学習状況調査」及び「確かな学力の伸長を図るための調査」の実施日・対象などは、3面をご参照ください。

伸びしろに期待大!



の中で言葉の意味がなくなっていくという経験を、それこそ大人が奪っているのではないかと。子どもが単語だけを並べて会話が出来てしまっている状況がある。だが、そういう状況をよくないと捉え、大人が意識するだけでも違ってくると思う。

○山口 本校では、校長から「子どもの言葉を引き取って教員がしゃべらないように」と言われている。つまり、子どもの言いたいことを代弁してしまっているが、それが子どもの言語活動を奪っていると思う。

○富永 全国学力・学習状況調査の「児童・生徒質問紙調査」の中で、本市と全国の子どもたちの生活習慣を比べてみると、顕著な状況が出ている (2面・図3参照)。

○司会 国語力が低下した大きな原因は何か。

○山口 子どもたちは日常生活でも映像文化やメール等の短文に慣れていて、丁寧にきちんと説明したり、言葉をつないでいくという体験が不足していると思う。

○司会 学習習慣と家でのテレビ等の視聴の関係については、学校での指導もあるだろうが、家庭に負うところも大きいのでは。

○山口 漢字のプリントを宿題に出した時に、「携帯電話で調べてもいいか」と質問した児童が高学年のクラスにいた。子どもにとっては、分からなければスマートフォンで調べることは、日常生活の一部になっていると思う。

○石居 辞書を引かなくても、パソコンやスマートフォンを使えばパッと調べたいことが出てくる。家で携帯電話やスマートフォンを使って学ぶこともありますが、定着させる